

「公開保育」が保育者にもたらすもの

松 延 毅

要 旨

本研究では、乳幼児施設において保育実践を公開する「公開保育」を実施することが、保育者にとってどのようなことをもたらし、保育者の専門性や資質にどのように関連しているかについて、公開保育を実施している保育者自身の語りを基に明らかにすることを目的とした。具体的には「公開保育」について保育者に対して、質問紙調査を行い「公開保育」を実施した園の保育者が、自らの保育を公開することや参加者と意見を交わすことから、どのように自らの成長に関連付けているのかについて調査し、SCAT を用いて分析を行った。

その結果、「公開保育」はより良い保育実践に向けて、保育における重点への認識を新たにする機会となっていることから、園の保育の質の向上だけでなく、保育者自身の専門性の向上にも関連づいていることが考えられた。

キーワード：SCAT、公開保育、保育者、専門性

1 問題と目的

(1)「公開保育」の重要性

平成 30 年に改訂された保育所保育指針の解説のなかに、「保育士の専門性は保育の質に直結する」という文言がある。加えて保育士の専門性を高める取り組みとしての職場での研修は、「自分たちの保育所の保育に求められる知識や技能を、自身あるいは同僚の実践事例から、意識的かつ意図的に学び、修得し、更に向上に努める場である」と示されている。またその場においては役職やキャリア関係なく、意見を交えていくことができる同僚性の育みも求められている。これらから、保育の質や保育士の専門性の向上を考える際、研修や職場内での同僚性は重要な視点と言える。

そのような研修の実施や同僚性の育みを基盤として保育の質の高まりや保育者の資質向上を考える際、「公開保育」が果たす効果も大きいと考えられる。厚生労働省（2019）は保育の質の向上を目指した保育現場での取り組みの一つとして「公開保育」の活用を事例として挙げており、今後「公開保育」を活用した保育の質向上や保育者の専門性の向上への取り組みはより高まっていくことが考えられる。また、全日本私立幼稚園幼児教育研究

機構(2017)は2017年から「ECEQ」と称した「公開保育を活用した幼児教育の質向上システム」を整え、幼稚園等が公開保育を実施し、外部の視点を導入することによって、自園の教育実践の質向上に繋げていく学校評価の実施支援システムを運用し、具体的に「公開保育」を活用した取り組みを進めている。

公開保育の意義について、関(1981)は研究発表会での公開保育について、学校教育で教師が行う研究授業から援用して、「教師相互の保育参観」と示し、他の保育者の保育を参観し、その後、実践に関連した教育上の目的や方法を議論するものであることを明らかにしている。またその上で、「個々の幼稚園や保育所の内部的研修のための活動ではなくて(それもあるが)、主に対外的・園外的・集合的な研修活動を意味している」と示し、公開保育の実施を通して、己の研鑽を積む機会になる可能性も示している。公開保育の重要性について、先述の関は「保育者の協力体制の確立をもたらす重要性」、「保育研修としての機会としての重要性」の二点を挙げ、同僚性や保育者の資質向上の観点から、その重要性を述べている。

(2)「公開保育」と保育者

一方で公開保育の内容(形態)は多様にあるのではないだろうか。公開保育のために、保育活動を構成したり、一斉活動を中心に公開したりする場合も考えられる。しかし、公開保育が保育者の研鑽が主たる目的であったとしても、その研鑽を積む保育者が保育に携わる理由は、乳幼児の子どもたちの育ちを保障するためであることから、公開保育のように乳幼児と保育者が必要となる研修形態ならば、乳幼児が日常と異なる状況で過ごすことを極力回避する必要性がある。また主体的な生活の営みのなかで自らを育んでいくことが、乳幼児期の子どもたちの育ちの特徴であるため、園内での限定的あるいは画一的な生活や活動の部分ではなく、乳幼児が自らの興味関心に基づいて遊んだり必要性に基づいて生活を送ったりする姿から、保育者や参加者が学んでいく必要があると考えられる。加えて保育を参観した後、参加者や園の保育者が乳幼児の遊びや生活、育ちなどについて意見を交わすことは、表面的には捉えにくい保育者の意図を言語化したり、多角的に自らの保育を考えたりしていく機会となることなどから重要と考えられる。

また、昨今の新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、非対面方式による研修方法も確立されるようになり、「公開保育」についても、ビデオカメラなどを園内に固定したり、保育者が身に付けたりすることで、撮影される映像を、インターネットを経由して観覧できる「オンライン公開保育」も各地で実践されるようになってきた。

そのような公開保育の在り方であっても、保育を開くこと、参加者と実践者が保育について振り返ったり協議を行ったりすることは同様に行われている。

（３）「公開保育」の定義

それらから、本研究で着目する「公開保育」は、日常的な園生活を公開すること、かつ公開後に保育者と参加者が意見を交わす時間を設けていることとする。

（４）本研究の目的

公開保育が全国各地で実施されている背景からも保育者の研鑽にとって有用性があり、参加者にとっても公開保育の実施園の保育者にとっても学びを得る機会となっていることが窺える。しかし公開保育の効果や保育者の育ちに着眼した先行研究は少なく、特に公開保育を実施した保育者の育ちに焦点を当てた研究は見られない。

そこで本研究では、研究 i として「公開保育」を実施した園の保育者が、自らの保育を公開することや参加者と意見を交わすことが保育者にとって、どのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

続けて研究 ii として、長い期間、公開保育を継続している施設の保育者を対象に「公開保育」を実施している大学附属幼稚園の保育者が、自らの保育を公開することや参加者と意見を交わすことから、どのように自らの成長に関連付けているのかを明らかにすることを目的とする。

２ 研究方法

（１）質問内容と分析方法の選定について

問題と目的で述べた通り、本研究では「公開保育」を日常的な園生活を公開すること、かつ公開後に保育者と参加者が意見を交わす時間を設けていることを定義し、保育者の育ちとの関連性を明らかにする視点とした。

本研究では、「公開保育」を実施した園の保育者が、自らの保育を公開することや参加者と意見を交わすことから、どのような影響を受けているのかを明らかにすることを目的とするため、Table1 に示した項目について自由記述式の質問紙調査を実施した。

調査によって得られた記述データは、大谷（2008）が開発した SCAT（Steps for Coding Theorization）によって分析する。SCAT は、比較的小さなデータからも、構成概念を 4 つのステップによって明示的に抽出することが可能で、言語データのメタな意味まで読み取り、構成概念を紡ぎだしてストーリー・ラインを記述し、そこから理論的記述を得ることができる分析方法である。上田（2013）も、言語データから象徴的な概念を抽出する方法として SCAT が有効であることを示している。そこで、SCAT を用いて、「公開保育」を実施した保育者が、その経験を自らの保育者としての成長にどのように関連付けているのかについてより細やかに明らかにしようと考えた。

研究協力者は、研究 i では宮城県内の A 認定こども園の保育者 3 名と新潟県内の B 保育

所の保育者3の名計6名に協力を得た。調査は2019年の12月に実施した。研究iiでは、新潟県内の大学附属幼稚園であるC幼稚園の保育者2名に協力を得た。調査は2020年の2月に実施した。

Table1 質問項目

(1)・(2) 回答者の所属等に関する質問
(3) 回答者の保育年数
(4) 回答者の公開保育の経験回数
(5) 自分の保育を公開することについてどのように感じているか。
(6) 公開保育にむけて準備や意識していることはどのようなことか。
(7) 参加者との語り合い（協議会や分科会・保育室公開など）をどのように感じているか。
(8) 公開保育や参加者との語り合いは「保育者の専門性や資質の向上」にどのように関連していると思うか。
(9) 公開保育や参加者との語り合いは「その後の自分の保育実践」にどのように関連していると思うか。

(2) 倫理的配慮

本研究にあたっては日本保育学会倫理綱領に則り、調査協力を依頼する施設の園長対し、口頭において研究趣旨を説明し、調査協力の承諾を得た。また調査協力者の匿名性の配慮をはじめとした人権に配慮することを説明し、調査協力への承諾を得た。

3. 結果と考察

(1) 研究iの結果と考察

研究iでは、「公開保育」を実施した園の保育者が、自らの保育を公開することや参加者と意見を交わすことが保育者にとって、どのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

まず研究協力者の保育年数を Table2-1、公開保育の経験回数を Table2-2 に示す。

Table2-1 研究iの研究協力者の保育経験年数

5年未満	3名
6年以上10年未満	2名
10年以上	1名

Table2-2

研究iの研究協力者の公開保育経験回数

2回	2名
3回	4名

続いて、研究iにおいて、質問項目(5)(6)(7)(8)(9)の記述内容を、SCATを用いて分析し、得られたストーリー・ラインを結果として示し、考察としてストーリー・ラインから得られた理論記述を示す。

1) 質問項目（5）「自分の保育を公開することについてどのように感じているか。」の
ストーリー・ライン

（5）－ 1

公開保育を経験した保育者は、同じ専門性を持つ人間に保育の公開をすることで、内省したり、保育観の再構築機会を得ているようである。保育者自身が、日々試行錯誤しているなかで、保育理念に基づいた個人の保育技術に対して同じ専門性の視点から本質的意見を受けたり、教育の多様な価値観の中で、多面的な視点や価値観への接触を経験することは、成長の糧の見出しが引き起こされ、その後の自発的学習へ発展し、自己成長の活力となっている。

（5）－ 2

一方、公開保育をする保育者は、非日常的な心理を経験していることがうかがえる。異なる保育文化や多様な価値観をもつ実践者に、保育理念や自分の価値観に基づいた実践を公開することは、保育者の視点や着眼点の懸念などから、心理的な圧力を感じることもある。

（5）－ 3

初回の経験は、未経験の非日常的な心理状況から体験の無自覚化になるようである。単発的な経験ではなく、継続的な公開の経験を得ていくことで、価値観の再構築と自己肯定が繰り返され、保育者自身の精神的成長が促され、質の高い実践への積極性にも繋がっていくことがうかがえる。

（5）－ 4

保育者自身が公開保育に対しての効果への肯定的認識や、経験への肯定的認識をもつことで、公開することでの自己成長を認識し、その後も自らの実践対象への保育行為を公開する意欲に関連づいている。

2) 質問項目（5）「自分の保育を公開することについてどのように感じているか。」の
理論記述

- A. 自分の保育を公開し、同じ専門性をもつ人間と意見を交わすことで、自らの保育観を再構築したり、保育実践を肯定的に受け止め、さらなる実践や学びの意欲を得ている。
- B. 公開保育時、保育者は緊張や不安などの非日常的な心理状況になっており、単発的な経験では自らの学びになりにくい。
- C. 公開保育を複数回経験していくことで、保育観の再構成や内省、自己肯定が繰

り返され、精神的な成長だけでなく、より良い保育実践への意欲を持っていく。同時に、公開保育が自らの成長に効果的であることを認識し、自らの保育を公開していくことについても意欲を持っていく。

3) 質問項目 (6) 「公開保育にむけて準備や意識していることはどのようなことか。」
のストーリー・ライン

(6) - 1

保育者は公開保育を、再考の機会と捉えており、これまでの子どもの育ちと保育行為への意識に目を向け、保育の意図や信念、課題の顕在化を図ったり、環境の再整備を行ったりしながら、仲間との綿密な用意と確認をおこなっている。

(6) - 2

一方で公開保育では子どもとの共有を図りつつ、加飾なしの日常披露を意識しており、当日も日常性の保守を念頭に置いているため、当日に至るまでの日常の重なりを大切に保育を進めている。

4) 質問項目 (6) 「公開保育にむけて準備や意識していることはどのようなことか。」
の理論記述

D. 保育者は公開保育を、自分の保育を振り返り、考える機会としている。

E. 特別な保育ではなく、日常を見せることを意識している。

5) 質問項目 (7) 「参加者との語り合い（協議会や分科会・保育室公開など）をどのように感じているか。」のストーリー・ライン

(7) - 1

保育者は参加者との語り合いを多面性と客観的視点に出会う機会と捉えているようである。語り合いという自己表出と他者受容のなかで保育者としての信条の表出と再確認が行われ、意見交換による気づきは多角的学びや視点の継続的思考をもたらし、多面的視点の価値を認識することにも繋がっている。

(7) - 2

語り合いのなかでは共通項と共感が生まれるだけでなく、他覚的視点による新規性や改善のヒントに出会っている。

そこでは外部評価により有能感刺激を得ているようであり、肯定享受による自己有能感への寄与も窺える。同時に保育者自身のテーマへの客観的視点を受けており、保育に対して価値観の思考機会と思考発想の享受機会にもなっている。

6) 質問項目 (7) 「参加者との語り合い（協議会や分科会・保育室公開など）をどのように感じているか。」の理論記述

- F. 保育者は語り合いを通して、保育の様々な考え方に触れ、それによって自らの保育価値観を揺さぶられている。
- G. 語り合いは保育者にとって、新規性のある気付きや自己有能感をもたらす一方で自身の保育価値観の思考機会となっている。

7) 質問項目 (8) 「公開保育や参加者との語り合いは「保育者の専門性や資質の向上」にどのように関連していると思うか。」のストーリー・ライン

(8) - 1

公開保育や参加者との語り合いについて、保育の成長と無関係の現状や保育について視覚的理解の限界性があったとしても、内省と改善の機会を生み出すことにより、日常の変革を促す機会となる。そこでは価値観への気づきや、成長可能性を感じられることから、保育公開と専門性向上の関連性を伺える。

(8) - 2

公開保育の場における共同学習による成長効果として、熟達者がもたらす学習意欲により、理念に基づく環境や保育過程に着眼していくなかで、言語化による認識や自覚が生まれ、対話による思考の深化がもたらされる。

(8) - 3

語り合いは、保育者同士の公平性による新規価値観の出会いを生み出しており、客観視と多角的視点による成長に繋がっていき。そこには保育観の研鑽と向上関連性がある。

8) 質問項目 (8) 「公開保育や参加者との語り合いは「保育者の専門性や資質の向上」にどのように関連していると思うか。」の理論記述

- H. 公開保育や語り合いによってこれまでの保育の考え方に再考を促し、自らの成

長の可能性を感じることができることから、専門性等の向上に寄与している。

- I. 専門性を高めていこうとする相手との共同学習により自らの学びへの意識が高まる。
- J. 立場にとらわれない対話と学びの機会により多様な気づきや価値観に触れることができる。

9) 質問項目 (9)「公開保育や参加者との語り合いは「その後の自分の保育実践」にどのように関連していると思うか。」のストーリー・ライン

(9) - 1

公開保育や参加者との語り合いは、保育への多様な視点による変革と向上や価値観の広がりと実践力向上をもたらし、肯定的な子ども理解の実践の積み重ねに関連付いている。

(9) - 2

公開保育や語り合いは、保育者の内省と実践力に関連し、模倣や試行錯誤による価値観の変容可能性を持っており、試行錯誤による気づきは、新規性への意欲にもなる。

(9) - 3

保育や子どもの育ちについての発信力や伝達表現力の視点の成長に関連づいたり、自らの保育研究への自己肯定も促している。

(9) - 4

公開保育や語り合いは、子どもに対して普遍性のある保育の根源的思想を考える機会となり、保育者は得た学びのフィッティングと効果予測をしつつ、実践への学びの活用を考えていき、自身にとって望ましい保育価値観の確立を図っていく。

10) 質問項目 (9)「公開保育や参加者との語り合いは「その後の自分の保育実践」にどのように関連していると思うか。」のストーリー・ライン

K. 公開保育や語り合いから自分の保育の視野を広げ子どもたちにとって望ましい子ども理解に基づいた保育実践を重ねていくことができる。

L. 公開保育や語り合いは、自らの保育実践の振り返りと実践の重なりに寄与しており、さらなるより良い保育への変革の可能性をもたらして、挑戦や試行錯誤を促していく。

M. 保育を通した子どもの育ちの伝え方を考えたり、保育実践研究に意欲をもっていく。

N. 子どもを中心とした保育の根源的な理念を確認し、学びを自分に合わせた糧と

しながら活用するなかで、自分自身の保育観の構築と確立が行われていく。

研究 i の結果と考察からは公開保育の実施については、これまでの保育を振り返ったうえで、当日に公開保育に向けた特別な保育をするわけではなく、日常の保育場面を見せることを意識していることが明らかとなった。

その家で、自らの保育を省察したり、参加者と保育の悩みなどを共有する機会となること、保育を開くことや対話をすることで、新しい価値観に触れ、自らの実践に活用しようとする姿があることが窺えた。公開保育のなかで行われる参加者との対話は、保育者としての専門性の向上を考えながら共同的に学んでいるため、自らの学びの意識が高まることも明らかとなった。この点については、公開保育を園以外の保育者との出会いが、自身の所属施設内の立場にとらわれずに学ぶことに繋がっているようであり、この点においても多様な気づきや価値観に触れることができているようである。

一方で、このような公開保育については、公開保育実施時に、見られている状況からの緊張や不安などの非日常的な心理状況になることも考えられるため、単発的な経験では自らの学びになりにくいことも窺えた。この点については、継続して、公開保育を経験していくことで、保育観の再構成や内省、自己肯定が繰り返され、精神的な成長だけでなく、より良い保育実践への意欲を持っていくであろうと考えられる。同時に、公開保育が自らの成長に効果的であることを認識し、自らの保育を公開していくことについても意欲をもっていくことが考えられる。この観点については、研究 i の研究協力施設が公開保育を始めて3年程度であったため、より長い期間公開保育を継続している施設の保育者を対象に研究を深める必要性がある。

（2）研究 ii の結果と考察

研究 i の結果と考察を受けて、研究 ii では、長い期間、公開保育を継続している施設の保育者を対象に「公開保育」を実施している大学附属幼稚園の保育者が、自らの保育を公開することや参加者と意見を交わすことから、どのように自らの成長に関連付けているのかを明らかにすることを目的とする。

まず、研究協力者の保育年数を Table3-1、公開保育の経験回数を Table3-2 に示す。

Table3-1
研究 ii の研究協力者の保育経験年数

5 年未満	2 名
-------	-----

Table3-2
研究 ii の研究協力者の公開保育経験回数

3 回	1 名
4 回	1 名

続いて、研究 ii において、質問項目（５）（６）（７）（８）（９）の記述内容を、SCATを用いて分析し、得られたストーリー・ラインを結果として示し、考察としてストーリー・ラインから得られた理論記述を示す。

- 1) 質問項目（５）「自分の保育を公開することについてどのように感じているか。」のストーリー・ライン

（５）

保育を開くことは、参加者が園の日常の鑑賞を通じて、保育者の資質・能力の育みについて、対話と学びへの関連性がある、自己研鑽の要素の一つと捉えている。

- 2) 質問項目（５）「自分の保育を公開することについてどのように感じているか。」の理論記述

A. 保育を開き、対話することで、保育者自身の専門性の研鑽に繋がる。

- 3) 質問項目（６）「公開保育にむけて準備や意識していることはどのようなことですか。」のストーリー・ライン

（６）－ 1

公開保育に向けて保育者は自園の研究課題への関連付けを考えており、その上で、実践実現思考を抱いている。

（６）－ 2

そのなかで、同僚との保育内容や子どもの姿の協力確認と共通理解をもつようにしており、当日は平常意識に基づきながら、保育行為と保育環境も平常性をもって整えるようにしている。

- 4) 質問項目（６）「公開保育にむけて準備や意識していることはどのようなことですか。」の理論記述

B. 大学附属の幼稚園教諭は、公開保育に向けて、自園の研究課題と関連付けて考えている。

C. 公開保育に向けての準備は、普段通りの保育を行うことを念頭に置いている。

- 5) 質問項目（7）「参加者との語り合い（協議会や分科会・保育室公開など）をどのように感じていますか。」のストーリー・ライン

（7）－ 1

参加者との語り合いは公開保育実践者にとって、多面的知識の獲得機会と捉えており、参加者と実践への理解を深めたり、理解を深めるための視点の享受を受けたりすることは、保育者の有益な学びとなっている。

（7）－ 2

語り合いは柔軟な対話形式をとることができると考えているほか、状況に応じてより良い形式の検討をすることも重要である。

- 6) 質項目（7）「参加者との語り合い（協議会や分科会・保育室公開など）をどのように感じていますか。」の理論記述

D. 協議会や分科会は、様々な考え方に触れたり、知識を獲得する機会となり、公開保育実践者にとって有意義な学びを生み出す。

E. 分科会などの形式は規模に応じて適切な形式を柔軟に考えていくことが望ましい。

- 7) 質問項目（8）「公開保育や参加者との語り合いは「保育者の専門性や資質の向上」にどのように関連していると思いますか」のストーリー・ライン

（8）－ 1

公開保育や語り合いは、キャリアや所属を超えた対話が生まれるため、自らの保育行為の脱主観的認識を与えることになり、新しい価値観との出会いが起こり、保育者自身の思考と実践力の拡充が図られる。

（8）－ 2

公開保育や語り合いはそのきっかけの保障となり、保育者の成長への起因となることで、保育の自己研鑽との関連付けがなされていく。

- 8) 質問項目（8）「公開保育や参加者との語り合いは「保育者の専門性や資質の向上」にどのように関連していると思いますか」の理論記述

F. 公開保育や語り合いは、様々な立場の人間の対話によって、新しい考え方に触れ、価値観と実践力が磨かれる。

G. 公開保育や語り合いは保育者の成長の一つの機会となる。

9) 質問項目 (9)「公開保育や参加者との語り合いは「その後の自分の保育実践」にどのように関連していると思いますか」のストーリー・ライン

(9) - 1

保育実践に園ごとの差異はあるものの、共通して子どもの育ちを支える実践者であることから、公開保育や語り合いによって、他と自身の実践の関連付けを行いながら、新しい情報や価値観を自らの保育実践への組み込みを考えたり、園への肯定的効果を検討したりしている。

(9) - 2

また自園の研究課題への肯定的参与に意欲が見られたり、子どもの育ちを考えて整えるヒト・モノ・コトについて改めて意識を向けたりするほか、日々の細やかな保育の重要性を認識したりしている。

10) 質問項目 (9)「公開保育や参加者との語り合いは「その後の自分の保育実践」にどのように関連していると思いますか」の理論記述

H. 公開保育や語り合いで得た知識や価値観を用いて、自身や自園のこれまでの知識や価値観との融合や効果を考えている。

I. 保育研究への意欲となったり、日常の保育環境の整備や日々の丁寧な実践の重要性を再認識している。

研究 ii の結果と考察から、公開保育を長い期間継続している大学附属の幼稚園の保育者においても、公開保育が日常の保育場面の公開であることを意識し、準備を行っていることが明らかとなった。また公開保育を通じた参加者との出会いを通して、多様な保育の視点や考え方に触れることは、保育者自身の保育価値観の再認識や再構築に寄与していることが窺えた。それは保育者に自らの研鑽を促すことであり、公開保育が保育者の専門性の向上に関連していること示唆するものであると考える。

公開保育や協議会での語り合いは、自分たちの保育研究への意欲となるだけでなく、より良い保育実践に向けて、保育における重点への認識を新たにしている機会になっていることから、園の保育の質の向上だけでなく、保育者自身の専門性の向上にも関連づいていると考えられる。

また興味深かった点として、研究対象とした大学附属の施設が研究を行う機関となっていることから、公開保育を実施する際に自園の研究課題との関連性も含めて考えており、公開保育の準備においても、同僚と保育内容や子どもの姿について、協力確認と共通理解をもつようにしていた。その上で研究課題について、日常的な保育実践場面から検証分析していく観点から、日常性の担保を重視していることも考えられる。

保育者同士の協力確認や共通確認については、大学附属施設以外の施設が公開保育をする際にも行っていると考えられるが、施設の特性の違いによっては、公開保育の位置づけや実施目的に違いがあり、事前の準備や当日に意識においても違いがあることも考えられる。

（４）総合考察

研究 i・ii から公開保育を通して保育者は、保育環境や援助の在り方、子ども理解の視点など様々な側面において、参加者との双方向性の学びを行っていることが明らかとなった。学びを通して自らの保育価値観に改めて目を向けることになり、自分自身の保育実践について意欲を大きくしたり、挑戦や新たな試行錯誤したりすることに寄与していることが窺えた。これは保育者の専門性の向上に関連づくものであり、各々の保育者の研鑽は延いては園全体の保育実践に効果が及ぶものであると考えられる。公開保育の取り組みについては、自分自身の保育を開くことや実践を語ることの非日常性を感じることも一部で示されているが、実体験を通じて保育者自身が学びを得ていくことの充実感などを感じていくことで成長の循環を生み出していくことも関連づくと考えられる。

乳幼児教育の重要性については、昨今ではヘックマン（2015）の研究などから明らかとなっており、保育の質についての議論は絶えない。保育の質については OECD が、「志向性の質」や「構造の質」、「過程の質」、「実施運営の質」、「教育の概念と実践、子どもの成果の質」を上げている。その中の、「過程の質」、「実施運営の質」、「教育の概念と実践、子どもの成果の質」において、保育者の資質や専門性の向上が寄与する部分は大きいと考えられるため、保育者自身が実体験を通して多様な学びの側面に触れられる公開保育の意義も大きいと考えられる。

加えて、近年は保育の評価アセスメントについても議論が活発に行われている。外部評価の一貫として公開保育が位置づいているものもあり、今後保育を開いていくことは、子どもたちの育ちの見える化と合わせて子どもたちの育ちに寄与するものとして意義を大きくしていくことが考えられる。

今回の研究では公開保育を行う保育者に関連づくものとしての全体的な様相が明らかになった。今後の展望として、公開保育の実施形態への着眼や、保育者の語り合いなどにも焦点を当てていくことで、より公開保育と保育者の成長の関連性や保育の質の向上について考察を重ねていきたい。

文 献

- ・厚生労働省. 2018 保育所保育指針解説
- ・厚生労働省. 2019 子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～
- ・関 勤. 1981 公開保育の意義と重要性：幼稚園や保育所の研究発表会はなぜ必要か 茨城大学教育学部教育研究所紀要. 13. 113-120
- ・全日本私立幼稚園幼児教育研究機構. 2017 公開保育を活用した幼児教育の質向上システム ECEQ 実施園ハンドブック 2019
- ・大谷 尚. 2008 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 ― 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き― 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学). 54(2). 27-44
- ・上田敏丈. 2013 保育者のいざこざ場面に対するかかわりに関する研究～発生の三層モデルに基づく保育行為スタイルに着目して～ 乳幼児教育学研究. 22. 19-29
- ・ジェームズ・J・ヘックマン(著) 古草秀子(翻訳). 2015 幼児教育の経済学. 東洋経済新報社